

国際セミナー「召命の司牧」

ジョスミー・ジョゼ博士 FMA

召命の司牧における霊的識別：教育的アプローチと体験的・物語的スタイル

皆さん、おはようございます！

本日は、「召命の道における霊的識別」について、教育的アプローチや体験的・物語的スタイルを交えながら話しする機会をいただき、心より感謝申し上げます。

1. はじめに物語をひとつご紹介します

ある思春期前の少女がいました。彼女は、信仰心の厚い家族、つまり両親や祖父母、親戚に囲まれて育ちましたが、10歳のときに父親を亡くしたことで、信仰の危機に直面しました。彼女は、「どうして神様は父を私から奪ったのだろうか？」と自問しました。「あんなに祈って、聖体拝領のたびに父の回復をお願いしたのに、神様は何もしてくれなかった。神様って、もしかして偏っているのかもしれない。そんな神様なんて信じたくない！」と思うようになりました。

このような思春期の混乱に加え、彼女の霊的な危機は非常に深刻でした。彼女は信仰生活の中で沈黙し、消極的になりました。心配した母親は、従姉妹である修道女に、娘の面倒を見て、宗教的な環境の中で勉学を続けさせるように頼みました。少女は渋々その提案を受け入れましたが、祈りの実践を強制されないことを条件としました。

修道院の共同体は、彼女の願いを尊重し、細心の注意を払って見守りました。やがて彼女は自分自身を少しずつ再発見していきました。創意工夫のあるカテケージス（信仰の教育）は、彼女の根本的な疑問に応えるものでしたし、聖人の生涯を学んだり、楽しみひとときに参加する中で、シスターたちの証しを通して、彼女は生きる目的を見出していきました。貧しい人や孤児との出会い、そして他者に仕えるシスターたちの喜びに触れることで、彼女は自分の人生の意義について考えるようになりました。1年が経つ頃には、彼女はこう尋ねました。「私も1年間、あなた方のように生活してみてもいいですか？」

修道院の共同体は彼女の願いに慎重かつ喜びをもって応じました。そして2000年の聖年に、彼女は17歳で志願者として修道生活を試みることを決意しました。家族や周りの人々は、この決断を一時の気の迷いと考え、数か月後には戻ってくるだろうと思っていました。しかし、彼らの予想に反して、彼女は初期養成課程を続けました。決して容易な道ではありませんでしたが、自らの選択を意識し、養成環境と初期養成の指導者たちから信頼を受けることで、他者のために生きるという決意はさらに深まりました。

修道生活は順風満帆ではありませんでした。母親の死、そして孤独感など、多くの困難な瞬間がありました。唯一の兄弟とその家族がカトリック教会から離れ、帰る家がない状況や、修道院での誤解も経験しました。こうした苦難は、彼女にとって実存的かつ霊的な危機となり、修道生活の理想と現実の間での葛藤を生じさせ、識別が求められる瞬間でした。

召命の識別は大変厳しく、骨の折れる道のりでした。それにもかかわらず、彼女は適切な時に適切な指導者を見つけることができ、その助けによって信仰を深め、微笑みをもって歩み続けることができました。神学者ヘンリー・J・M・ヌーウェンは、『傷ついた癒し手』の最後の章で「癒し手とは、常に傷ついた人間である」と述べていますが、彼女もまたそのように傷つきながらも命を分かち合い、教育現場で召命の文化を育むことにより、他者を修道生活へと導く励みとなりました。

実際、この修道女の姿に感動して修道生活に入り、他者のために奉仕することを選んだ人が2人います。1人は現在仮誓願を立てている若い女性で、彼女のケアがその奉仕の道を選ぶきっかけとなったと語っています。もう1人は大学生で、修道女の喜びに触れて修道生活を選び、現在は終生誓願を立て、引き続き他者のために生きています。

大切な人を失うなど、通常であれば深い悲しみや挫折となる経験は、かえって神の計画への信仰を深める機会となりました。彼女は、日々の生活の中で復活した主の臨在を感じ、様々な感情のエネルギーを内なる歩みへと変えることで、神の呼びかけに応えていきました。感情の重みは復活した主への信頼と召命の意識に導かれ、内なる力となりました。この物語の修道女は、今もなお、父なる神の愛を表現するしるしとして生きています。

この話を聞いて、皆さんもきっと、自らの人生における同じような経験を思い出されたことでしょう。ここで少し黙想の時間を取り、重要な選択をした瞬間について振り返っていただきたいと思います。

2. 選択は避けられない

今日の社会では、選択は避けられないものです。私たちは常にさまざまな選択肢に直面し、決断を求められます。時には自動的に、あるいは直感的に決断を下すこともありますが、立ち止まって熟考することもあれば、結論を出すまでに時間をかけることもあります。物語の主人公のように人生の選択に迫られる場合、特に識別が求められます。このため、識別は単なる魅力的なスタイルではなく、人間にとって根本的な生き方であり、キリスト者にとっても重要なものです。

17歳や思春期で、果たして正しい選択ができるでしょうか？ 何歳から識別や選択は始まるのでしょうか？ 識別にはどのような特徴があるのでしょうか？

3. 識別の特徴

識別は、私たちが充実した人生を送るために必要な要素である意識、自由、責任に関わっています。

識別は、まず意識と密接に結びついています。「識別する」という動詞は、「選択する」という意味を含んでいるからです。ふるいを使って砂や粉をふるい分けることを想像してください。ふるいにかけることで、私たちに有益なものと、そうでないものを区別することができます。こうして初めて、私たちは自分にとって最善のものを選ぶことができます。ふるいは、私たちの内なる自己、つまり、欲望や恐れ、事実、規則、期待、希望などが詰まった心のメタファーです。

人間的な視点から見れば、識別とは、自分に有益なものを認識し、害を与えるものから解放されることです。霊的なレベルでは、識別はさらに深まり、聖霊によるインスピレーションが神からのもので、私たちの幸福に導くものであるかどうかを見極めることが含まれます。

欲望

識別と選択の出発点は、自分の内にある欲望を認識することです。欲望は、私たちが動かし、前進させる原動力です。ラテン語の *desiderium* (欲望) は、二つの部分から成り立っています。接頭辞「de-」は「欠如」を意味し、これは欲望の根本的な要素を表します。つまり、欲望するということは、今そのものを持っていないことを意味します。

欲望を認めることが難しいのは、時に自分に欠けていることを認めることがプライドによって妨げられるからです。

イエスは、人々との出会いの中で、彼らが自分の欠如と正直に向き合うように促されました。こうして、神が示される方向へ進む準備ができるのです。「何を探しているのか？」というのは、ヨハネによる福音書でイエスが最初に発した言葉ですが、カナの婚宴でぶどう酒が不足していたことで、真に必要なものを求める動機が与えられたように、サマリアの女性も自分の人生に愛が不足している現実に向き合わされました。彼女は真に愛された経験がなく、5人の夫を持ちながらも心の空白を抱えていました。

この欲望を認識すると、私たちはそれを追い求める方向を見出します。desideriumの第二部分、sidus（星）とは、欠如が私たちの星、つまり進むべき方向を指し示すものであるという意味です。

マタイの福音書に登場する東方の博士たちも、自らの星を追う旅の中で安心を捨て、未知の間を進むことを選びました。すべてを制御しようとする者には、欲望が入り込む余地がなく、求めるものを見出すことは困難です。博士たちは、星が導く先が予想もしなかった場所であっても、星に従い、ベツレヘムへと進みました。

感情の領域

一度、私たちが欲望によって動かされると、道中で出会うものを理解するための指針としての印を探することができます。識別の第一の目的は、ただ選択を下すことではなく、自分の中で動いているものに気づくことです。この気づきによってこそ、私たちは真に自由になることができるのです。

ヨットに乗っていると想像してみてください。風の向きを知り、その風をどう利用するかを理解しているなら、私たちは船を思うままに操ることができます。しかし、風を知らず、あるいは風をうまく利用する方法を知らなければ、私たちの船は波に揺さぶられ、意図しない場所にたどり着いたり、時には岩に衝突する危険すらあります。このヨットは、私たちの人生のメタファーです。風は私たちの感情生活を表し、私たちを動かしてくれるものです。内なる動きを無視すれば、知らず知らずのうちに感情に振り回され、自分の人生に対する自由を失ってしまうでしょう。

この複雑で混乱しやすい感情の領域において、まずは感情と気持ちの区別を学ぶことが大切です。選択において重要なのは感情ではなく、気持ち（情緒）です。感情とは、外部の状況や表情、言葉、音楽などに対する一時的で無意識な反応です。感情は、刺激が消えるとともに薄れていきます。感情は公的なものであり、その身体的な兆候は誰で

も観察することができますし、理論的には脳内の活性化を検証することも可能です。

一方で、気持ちは単なる外部の刺激に反応したものではなく、持続するものです。気持ちは、しばしばその人の思考の結果であり、ある状況や出来事に対する反応として育まれたものです。気持ちは、私たちが何を考え、どう感じているかを反映しており、それは私たちの意見や解釈を明らかにするものです。この意味で気持ちは私的なものであり、私たちの考えや感じ方に結びついているものです。エピクテトスは「私たちが悩ませるのは物事そのものではなく、それに対する私たちの見方である」と言っています。

意思決定の力学

このように、気持ちと思考の関係が識別の中心となります。まず、人間的なレベルでこの力学を分析し、それが霊的識別の基盤としてどのように機能するかを考えてみましょう。たとえば、試験を控えた状況を想像してください。この試験に向けて不安を感じるとき、私たちはその不安の背後にある考えを探ることができます。

仮説1: 「私は価値がない人間だ。私は失敗するに違いない。」

仮説2: 「試験まであと1週間あるけど、まだ100ページも残っている。」

1つ目の考えは、私を助けてくれるものではありませんし、根拠のない否定的な考えかもしれません。ですから、このような考えを続けることは避けるべきです。しかし、2つ目の考えは私を助けてくれます。これは現実に基づいており、残りのページを読もうとする動機づけとなるからです。

このように理解すると、霊的識別の力学についても同様に考えることができます。主はさまざまな仲介者を通じて、あるいは直接、私たちを内的な幸福や成長に導く一方で、人間の性質の敵（聖イグナチオが言う「悪の霊」）は、私たちを内的な充足から引き離そうとする思考や気持ちをかき立てます。どちらの思考も、私たちが識別を行う際の感情や気持ちとして現れてきます。思考には常に感情的な影響が伴っており、私たちの識別にはその違いを見極める洞察力が求められます。

識別においては、まず自分が特定の状況に直面しているとき、あるいは祈りの中で聖書の言葉に耳を傾けているときに感じる気持ちに注意を向けます。そして、その気持ちの背後にある考えがどのようなものであり、どこから来ているのかを探ることが必要です。善の霊からのものか、あるいは悪の霊からのものか（聖イグナチオの用語を使えば「良き霊」か「悪しき霊」か）を見極めるのです。

霊動弁別のルールの詳細には立ち入らないものの、一般的に言って、静かな気持ちが

常に「善の霊」によるものとは限りません。もし私たちが幸福へと至る道ではない方向に進んでいるならば、悪しき霊は不安を感じさせないことで、私たちをそのままの道にとどめようとするでしょう。同様に、不安や孤独感は時に神からのものであり、私たちが自らにとって害をなす道から離れるよう揺さぶりかけることもあるのです。

責任、犠牲、そして開放性

識別には、自由と責任を持つこと、つまり信仰において成熟した人格が前提となります。しかし、若者が責任を取る力や意志を持っていないことも多々あり、またその代わりに責任を取る大人たちが存在します。このような大人たちは、他者を支配する小さな喜びを感じることもあるでしょう。もし私たちが真に成長を促すならば、若者たちが自主的に選択し、内省し、心の中で何が動いているのかを認識できるように同伴しなければなりません。

すべての選択は、他の可能性を断つことで初めて「決断」となります。別の道が残っている限り、真の決断とは言えません。実際、「決める」という言葉は「切る」という意味を含んでいます。責任には常に犠牲が伴い、それは失敗する可能性に直面する勇気を意味します。選択をする道では、自己中心的な態度を離れ、内面的な現実（自分が何者であるか）と同時に外面的な現実（自分がどこにいるのか）にも目を向けることが必要です。

私たちは、ただ自分自身のためだけに決断を下すわけではなく、その選択は他者にも必ず影響を及ぼします。こうして私たちが他者を顧みるとき、そこに決断の宣教的な側面が現れます。同行者として、決して他者を閉じ込めるのではなく、その人が外の現実にも目を向けられるよう支援することが重要です。私たちが下す決断は、単に自己の利益ではなく、他者のために貢献できる善をも考慮に入れるべきなのです。

4. 識別における教育の役割

識別、特に召命の識別において、教育の役割は、個人が自らの召命を真に意識的で正直に見出せるように導く重要な要素です。教育的アプローチは、識別における自己理解や、選択、プロセス中に浮かび上がる内面的な力動を反映するための道具や方法を提供します。ここでは、教育の3つの主要な次元について、具体例を交えながら見ていきます。

4.1. 傾聴の教育

傾聴は、真の識別のプロセスの第一歩です。単に「聞く」だけでなく、個人が自分の体験や感情、願望を自由に表現できるような場を提供することが傾聴です。「傾聴の教育」は、相手の言葉をただ受動的に聞くのではなく、安心できる場を作り、共感と尊重を持って耳を傾けるという教育的アプローチです。相手の言葉だけでなく、感情や思考、内なる願望にまで注意を向けるこの傾聴は、特に召命への導きにおいて重要な役割を果たします。

召命の同伴者は、偏見を持たず、じっくりと耳を傾ける姿勢が求められます。それは、相手に共感と開かれた心で寄り添い、心の深層を探るための場を提供するということです。真の召命を見出すためには、他者の価値観や目標が、自らの生きる道と一致するものであるかどうかを確認することが求められます。

例：

若者が召命の道に進むか、社会生活を続けるかについて迷っているとしましょう。彼が召命の同伴者と対話し、混乱や優柔不断を口にする場面です。同伴者はすぐに回答や解決策を提供するのではなく、彼の話に辛抱強く耳を傾け、その不安や夢、希望に耳を傾けます。このような辛抱強い傾聴が、彼に平穏と内省の機会を与え、真の気持ちに気づく助けとなります。傾聴されることによって、自分の意見が尊重され、偏見なく受け入れられていると感じられ、真の識別が始まる準備が整います。

4.2. 疑問と探求の教育

疑問や不安は識別において自然かつ健全な要素であり、同伴者は、最終的な結論に急がず、疑問を持ち続けるプロセスを支援しなければなりません。

4.2. 疑問と探求の教育

疑問は識別のプロセスにおいて自然かつ健全な要素です。同伴者は、最終的な答えを急がずに、対象者が本質的な問いを考え、疑問を持つことを通じて、識別を深めていくように促す必要があります。この「疑問と探求の教育」は、成長を助け、内面的な理解を広げるための重要な手段です。疑問は弱さや欠点と捉えられることもありますが、実際には成長のための資源といえます。疑問は、自己認識や批判的な思考を育むきっかけになり、内省を深める助けになります。

同伴者は対象者が疑問を抱え、自己を省みるために、問いかけを行います。それはすぐに答えが出るような質問ではなく、深く考えさせるような、開かれた問いであるべ

きです。このような質問を投げかけることで、相手は考えを深め、答えがすぐには出ないとしても、内なる探求を続けていく道筋が示されます。

例：

ある女性が結婚と宣教生活という二つの召命の間で迷っているとします。彼女は、家庭を築くことへの強い願いと、他者への奉仕に自らを捧げることへの深い思いの板挟みになっています。この時、彼女の同伴者は、すぐに解決策を示すのではなく、彼女に根本的な問いを投げかけます。「どの選択があなたに心の平安をもたらしますか？」「あなたの心の奥底にある最も強い望みは何ですか？」「あなたを迷わせている恐れは何ですか？」このような探求を促す教育のアプローチは、彼女が内面的な真実に向き合い、確かな答えがまだ出なくとも、時間をかけて内なる希望や願望を深めていく助けとなります。

4.3. 自由の教育

識別は常に、対象者が自らの内的自由に向かうものでなければなりません。家族、社会、あるいは共同体からの圧力は、真の識別を妨げる要因となりえます。「自由の教育」とは、個人が外部の期待や圧力によって選択が束縛されることなく、自らの意志で決断できる環境を整えることです。

同伴者は、対象者が自身の自由に基づいて決断を下すことができるようにサポートする必要があります。たとえば、ある男性が司祭になるべきかを考えているが、家族から強く勧められているという状況を想像してください。彼の霊的指導者は、彼に対し、その選択が真に彼自身のものであるか、あるいは他者の期待を満たすために行おうとしているだけではないかを問いかけます。彼は、家族や共同体の期待に縛られることなく、自身の心の奥にある願望に基づいて選択するように導かれます。このような自由のあるアプローチが、彼にとって後悔のない、誠実な決断を助けるのです。

5. 識別プロセスにおける課題

識別は、複雑で個人的なプロセスです。内なる声や霊的なインスピレーションに耳を傾け、また人生の状況を客観的に分析するなど、さまざまな側面が含まれますが、この道のりにはいくつかの困難が伴います。以下に、識別の過程で直面しがちな主な課題をいくつか挙げます。

5.1. 失敗への恐れ、未来への不安、そして平凡さへの懸念

識別プロセスで特に一般的な課題のひとつが、失敗への恐れと将来への不安です。多

くの人々、特に若者は「間違っただ選択をしたくない」という不安を抱き、自分が進むべき道が正しいものであるのかを確認したいと望みます。しかし、識別は必ずしも明快な答えを提供するものではなく、むしろ信頼をもって一步を踏み出すことが求められる旅です。絶対的に完璧な道は存在せず、たとえ選択が困難を伴うものであっても、また、失敗を経験するとしても、それ自体が成長の一環として役立つことを理解することが大切です。

霊的な同伴者は、対象者に不確実性の中でも神が共にいて導いてくださるという信頼を持たせること、また、一見失敗に見える経験を通じて成長や学びの機会があると信じられるように導くことが重要です。このように、不確実性と共に歩む勇気を持つことこそ、識別における重要な要素です。

また、識別を行う者が自身の内的なプロセスを信じることができるように、同伴者がその内的プロセスを支えることも重要です。識別は単なる理性的な行為ではなく、霊的な洞察や直感に支えられています。疑いや不安がある中でも、個人が自らの直感や霊的な体験を信頼し、充実した選択を行えるようにすることが必要です。

5.2. 外部からの期待の影響

もうひとつの課題として、家族、社会、そして宗教共同体からの期待が挙げられます。特に家庭の中で、親が自分の希望や夢を子どもに投影する場合、このような期待は選択を制約する原因となりえます。家族の期待に合わせた決断は、その人本来の召命や内なる願望を反映しないため、混乱や罪悪感、さらにはフラストレーションを引き起こすこともあります。

この課題を克服するためには、個人の自主性と意思決定の自由を支える教育が必要です。同伴者は、識別をその人固有のプロセスとして捉え、外部の期待よりも自己の内なる声と神との関係に従うことができるよう、サポートする役割を担います。これは、自己理解や内なる価値観を深め、他者の影響を受けずに自分自身の道を確認する力を育むプロセスでもあります。

外部からの影響に対処するもう一つの方法としては、自己のアイデンティティと召命に対する深い理解を促すことです。自分の価値観、希望、才能を自覚することで、選択に対する明確さと自信が養われます。特に家族や周囲との対話を管理する力を育てることで、アドバイスに耳を傾けつつも、自分の意志を固めることができます。このように、識別においては、神や自分の内なるプロセスを信頼しながら、自律的な選択を重ねてい

くための教育が重要です。

6. 個別の同伴の役割

個別的な同伴とは、特定のニーズや経験、そして人生の状況を考慮しながら、個人の霊的成長を支えるプロセスです。同伴者は、標準化された支援ではなく、個人の独自性に焦点を当て、成長と識別を支援することが求められます。ここでは、同伴を通じてどのように成長と識別が深まるのか、具体的な要素について述べます。

6.1 段階的な成長を支えること

段階的な成長を支える同伴とは、識別が予測可能で一律な過程ではないことを理解することです。成長のプロセスには、疑い、不安、停滞の瞬間も含まれ、直線的なものではありません。霊的な同伴者や支援者は、対象者のペースやリズムを尊重し、無理強いすることなく時間をかけて寄り添うことが求められます。識別の道には、深い沈黙と熟考の場が必要であり、それが本物の識別を促す要素となります。

6.2 兆しと霊的インスピレーションの認識

同伴者は、単なる感情的な安らぎを提供するにとどまらず、対象者が識別のプロセスの中で出会う「兆し」を認識し、それらを理解できるようサポートする役割を担います。こうした兆しは、重要な出来事や直感、言葉、あるいは特別な出会いとして現れることもあります。キリスト教の伝統では、これらの兆しは神が人の人生に働きかけるサインと見なされますが、広い意味では、人生全般に存在する意義深いシンボルとしても理解されます。

6.3 共同体の体験

識別は個人のプロセスである一方で、宗教的共同体や信仰共同体の中で深められることが多いです。共同体は分かち合いとサポートの場として機能し、他者の経験や知恵が識別を深める手助けをしてくれます。共同体内での話し合いや祈り、そして信仰の実践は、個人の識別を支える重要な環境を提供します。

結論：生き生きとした識別のために

識別は、召命の選択だけでなく、霊的かつ個人的な成長のプロセスとしても意義あるものです。識別を通じて、私たちは神との対話と、日々の体験に深い意味を与える生活を学びます。そして、識別のプロセスは、自分がより豊かに生きるための旅であり、

信仰に基づく選択を続けていくための道です。

最後に、サレジオ会の全国召命アニメーション事務局による「召命アニメーションプロジェクト」をご紹介します。

このプロジェクトは、過去に出版された2冊の書籍（2009年、2013年）に関連しており、サレジオ会の伝統と経験に基づいて、霊動弁別のための健全な指針を提供しようとするものです。このプロジェクトの最新刊は「良質な素材 (Buona Stoffa)」と題され、あらかじめ決められたレシピを提供するのではなく、識別のための洞察を育むためのガイドラインを提示しています。

このプロジェクトは3つの章に分かれています。

第1章：経験的・文脈的な枠組み

第一章は、個人が他者と共に生きるための基本的な枠組みを築くことを目的とし、共感的な同伴についての指針を提供しています。

第2章：基礎的・カリスマ的な要素

第二章では、サレジオ会がヴァルドッコで実施した同伴の方法に焦点を当て、サレジオ会独自の霊性や教育スタイルを強調しています。

第3章：実践的な提案と基準

最後の第三章では、具体的な識別の実践法やバランスを見つけるための基準が紹介されています。ドン・ボスコの生涯におけるエピソードや彼の教育的遺産を通して、現代の若者にとって有効な同伴方法を提案しています。

プロジェクトの紹介

「良質な素材 (Buona Stoffa)」は、若者が自ら選んだ霊的指導者に身を委ね、その指導のもとで自分の召命を見出していくプロセスを表しています。教育者は、熟練した仕立て屋のように、若者が自身の内にある豊かな可能性を引き出せるよう支援することが求められます。これは非常に責任のある仕事であり、若者たちが信頼できる教育環境の中でサポートと指導を受けながら、自分自身の道を進むための準備を整えることができるようにするものです。

このプロジェクトの紹介ビデオ（8分）は、サレジオ会のビジョンと「良質な素材」

の意味についてさらに理解を深める内容となっていますので、ぜひご覧ください。

若者が求める同伴者の資質

若者たちは、自分たちを導く同伴者に対して次のような資質を求めています。「教会と社会に献身し、誠実な信仰を持ち、神聖さを追求する人。偏見を持たず、親身に耳を傾け、若者たちの必要に真摯に応え、愛に満ちた心を持つ人。また、自己認識力を持ち、自分の限界を理解し、霊的生活の喜びと苦しみを経験している人です。」

最も重要な資質は、同伴者自身が「人間であること」を認識すること、すなわち、自らも間違いや過ちを経験する可能性がある赦された罪人であることを理解することです。同伴者は、若者を受動的な従者として指導するのではなく、彼らと共に歩み、識別のプロセスにおける自由を尊重し、自分の決断を支える手助けをする存在であるべきです。若者が教会の生活に積極的に参加し、信仰の種が育まれるようにするため、同伴者は司祭や奉献された人だけでなく、平信徒もその役割を果たせるように備えられています。

考察のための質問

以下の問いかけを通して、皆さんご自身の識別の旅を深めていただければと思います。

自分の置かれている状況の中で、自身の召命を見極める際に直面している実際的な困難は何でしょうか？また、それらの困難が召命の旅にどのような影響を与えているのでしょうか？

現代の若者の声に真摯に耳を傾け、彼らとの真の対話を実現するためには、どのような課題があり、それを克服するにはどうすればよいのでしょうか？

聖霊の働きは必ずしも即時に現れるわけではありませんが、召命の文化を育むうえでの主な課題は何でしょうか？それにどう対処することができるのでしょうか？

終わりに

皆様と共に、召命の識別とそのための教育的アプローチについて考える機会を持たたことを感謝いたします。識別は単なる個人的な選択にとどまらず、教会と社会全体に意味深い影響をもたらすものです。若者たちが豊かで意味ある人生を送るための手助けとなる同伴者であることの意義を深く考えながら、共にこの旅を続けていけることを祈ります。

どうぞ、神の祝福と導きが皆様の識別の旅に共にありますように。